

いと申し出られ、その辞意は相當に強いものであります。しかし私はまた先生の引退を惜んで、何とかして新制大学の組織の中に加わっていただこうと思いとめようとした。そうするうちに私は愛媛大学の方に転任することになり、倉橋さんのお申出を後任者に残して立ちました。私がこうしたことと多忙を極めたことのためにお見舞もできずにうちすぎましたが、二十七年私は退官して東京に帰り、倉橋さんをお宅にお見舞しましたが、その時は病臥中でおめにかかれず、その後は一進一退の御容態と承っていましたが遂に打ちつつろいで昔の苦心談をすることもできずに、幽明相隔てるようになつたことは残念にたえません。終戦後の教育革新のあの難事業に学校の内外にわたつて尽瘁された尊いお働きに對して中心感謝すると共に、わが国幼稚園教育に対する偉大な功績を称えて倉橋さんを思う言葉とします。

(元お茶の水女子大学長)

偉大なる

幼稚園教育家

堀 藏

倉橋先生は明治三十九年七年、東京帝国大学文科大学哲学科を卒業せられ、自ら求め、明治四十二年頃から東京女子高等師範学校附属幼稚園で幼児心理の研究に従事せられた。これが先生の幼稚園教育に足を踏み入れた第一歩である。そして大正六年十一月、東京女子高等学校教授に任せられて附属幼稚園主事となられ、大正八年十二月まで、幼稚園主事として活躍せられた。それから二年間の海外留学を終えて帰朝せられ、大正十一正三月より大正十三年十二月まで、二年九ヶ月、幼稚園主事として勤務せられた。そして三年間の附属高等女学校主事を経て、昭和五年十一月から昭和二十四年十二月退官せられるまで、実に十九年一月、専ら幼稚園主事として勤務せられた。それで、倉橋先生は前後三回、二十四年間

の附属幼稚園主事の生活を中心として、四十五年間の長きに亘って、終始、我が国幼稚園教育の発展に尽瘁せられた。その大功績は他に類例がない。實に倉橋先生は偉大なる幼稚園教育家であったのである。

X

倉橋先生はペスタロチーやフレーベルの如き逆境に立った大教育家とは異なる恵まれた環境に育ち、まことに恵まれた大学教育を受けた幼児研究の大家であり、恵まれた幼児教育を施こす模範的な附属幼稚園の教育を中心として、我が国の幼稚園教育の発展に寄与せられた大教育家であった。曾つて教育週報は、倉橋先生を評して、

「つきたての大きな鏡餅のようだ」といった。

まことに、倉橋先生の顔容でも体格でも、また人格でも、つきたてのお餅の如く、福德円満の相に満ち、ペスタロチーやフレーベルを見るが多き生活苦の片鱗も見出すことが出来なかつた。倉橋先生の生活態度においても、その研究活動においても、またその全教育活動においても、正しさに偉大なる大教育家であった。その一言隻句も悉く保育法真諦であつたのである。

X

倉橋先生はその名著、「幼稚園保育法真諦」の序に、次のように述べてある。

「保育法真諦とは、われながら、おこがまし過ぎる僭称である。識者の笑いを買うをおそれる。实は保育法に関する一つの考え方というべきであろう。ただ、その考え方方が自分としては、之れ以上動かせないのである。身を幼稚園に置くこと久しい。疑惑と攻究と、又いつも附きまとう躊躇とを経て、やつとここに落ちついた考え方なのである。自分では、少くも今のことろ、之れを真諦と信じている。

フレーベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化した幼稚園を疑う。定型と機械化とによつて、幼児のいきいきしさを奪う幼稚園を慨く。幼児を無理に自分の方へ捕えて、幼児の方へ赴き即こうとするこまやかさのない幼稚園を忌むつまりは、幼児を教育すると称して、幼児を先づ生活させることをしない幼稚園に反対する。しかも之れ皆、他に対じてのみいう言葉ではない。そこで、私は思い切つて従来の幼稚園型を破つて見た。古い殻を破つたら、その中から見つけたものが此の真諦である。」云々。
(元お茶の水女子大教授)